

小学校5年社会科

「これからの食料生産」 (全6時間)

授業者 鎌田 尚吾

実践のポイント

食料自給率(カロリーベース)39%である日本。しかし、日々の生活では食料に困ることはほとんどありません。この実践は、子供たちが食料生産や食生活にかかわる課題を見付け、解決していく内容です。

そのために、「未来の食を守る」という単元テーマを設定しました。さらに、子供自身による調査活動の時間や資料を丁寧に読み取る交流場面を必要に応じて設定しました。これらにより、現在の社会における食料生産や食生活の課題、現在行われている取組、そして自分たちがこれから目指していくべき姿をとらえることができると思いました。

授業のねらいと展開

この単元では、日本の食料生産が抱えている問題を意欲的に追究し、これからの食料生産や食生活のあり方について話し合い、関心をもつことをねらいとしました。そのためには単元を通して、子供たち自身の思いを大切に学習を進めていくことが大切です。

まずは、食料に対する子供の価値観についてもう一度考えることから始めました。これまでの「米づくり」や「水産業」の学習において、子供たちは生産者の工夫や努力、苦勞を学び、日本の農業や水産業に対する誇りを感じています。

そのような子供たちに、日本の食料自給率(カロリーベース)の低さを提示しました。食料自給率の低さから、輸入している食料品の多さに目を向けた子供たちは、「どうしてこんなに低いのかな?」「大丈夫?」「少し心配…。」「そういえば、外国産が増えているって言っていたね…。」と、それぞれの疑問や気付きを交流しました。そして、全体で追究していく単元テーマを「未来の食を守るために」と設定しました。これにより、日本を背負っていく子供たちが主体的に学習を進めていくことができるようにしました。それぞれの課題追究と交流によって、食に対する関心を高めていくとともに、問題点を整理し、焦点化することで、単元テーマに近付いていくことができました。



既習単元の内容を見直し、生産者の工夫や努力に迫る



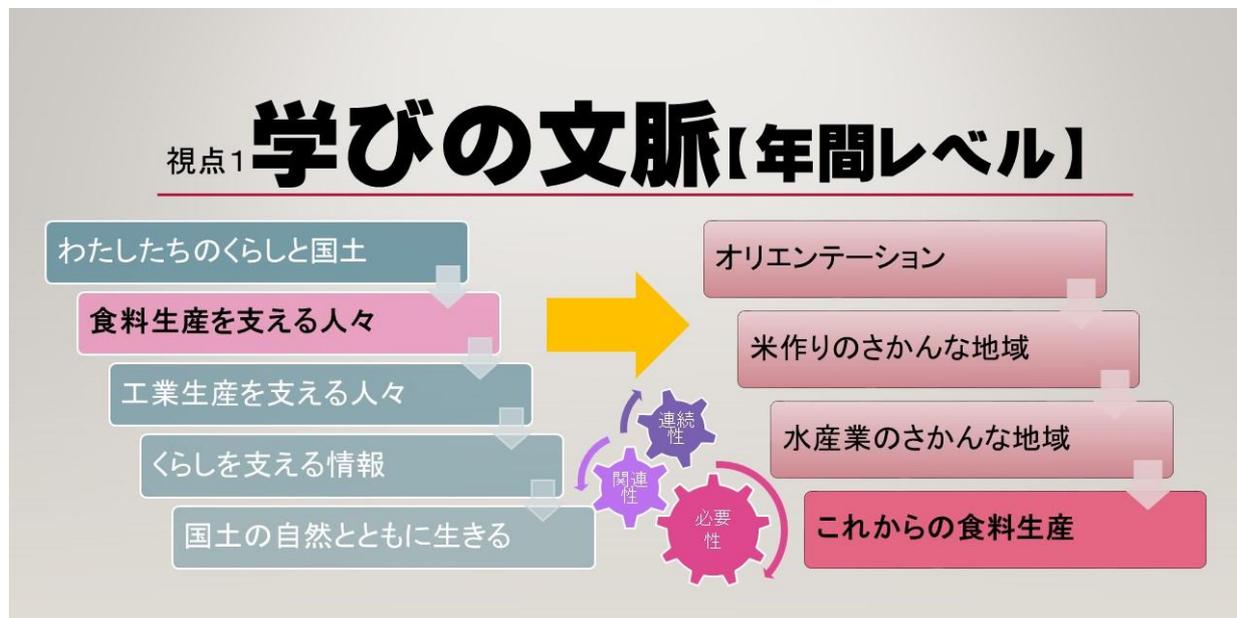
疑問や気付きを交流し、単元テーマを設定する



必要に応じて交流する

全体交流

視点1:学びの文脈のある単元を構想する



本実践における年間レベルでの「学びの文脈」イメージ

子供が学びの連続性、必要性、関連性を自覚しながら学ぶことができるように学びの文脈のある単元を構想しました。今回の単元「これからの食料生産」は、「米作りのさかんな地域」「水産業のさかんな地域」での学び、思いを継承しながら、問題意識を醸成することができます。

- ① 既習内容である「米作り」と「水産業」の学習を振り返る。
- ② 食料自給率(カロリーベース)について知り、日本はどのくらいか予想する。
- ③ 食料自給率の低さを知る。
- ④ 「どうして？」から輸入食材の多さに目を向ける。
- ⑤ 輸入食材がなくなった場合の食卓の様子を見る。
- ⑥ 食料自給率の経年変化のグラフや他国との比較資料を見る。
- ⑦ 疑問や気づきを交流する。

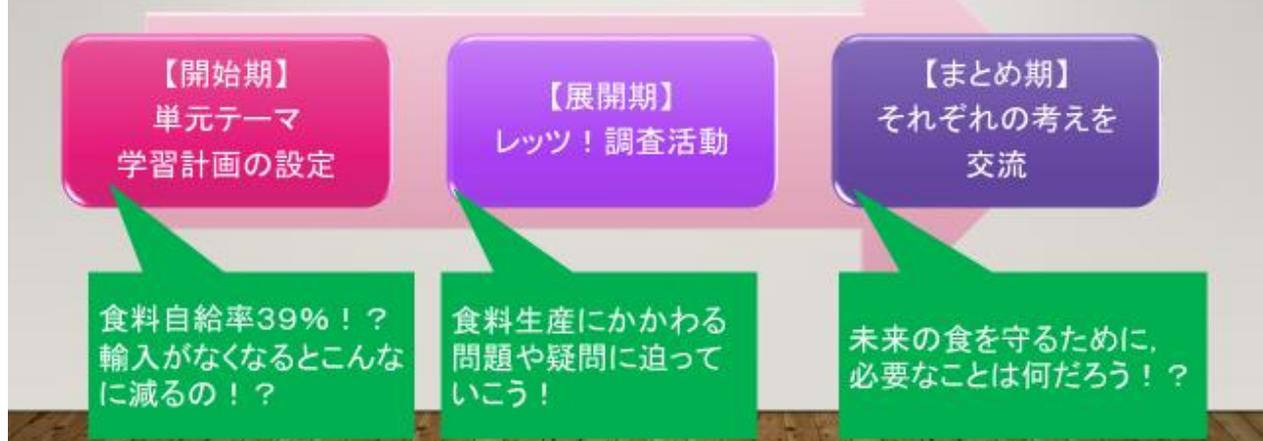
単元テーマの設定「未来の食を守るために」

(図1) 単元テーマ設定の流れ

単元開始期では、まず食料自給率(カロリーベース)の低さを提示することで、子供の「どうして？」を引き出しました。次に、輸入の多さに気付いた子供たちから「どんなものが？」や、輸入食材がなくなった場合の食卓の提示により、「こんなに？」という声が聞かれました。そこで、子

供たちに食料自給率の経年変化グラフや他国との比較資料を提示します。それにより、「原因はなんだろう?」「自給率は低くてもいいのかな?」「輸入食材が多いってことは…。」「これからどうなるの?」「どうすればいいの?」など、子供たちからたくさんの疑問が出てきました。それらを集約し、単元を通した課題として、単元テーマ「未来の食を守るために!」を設定しました(図1)。

視点1 学びの文脈【単元レベル】



本実践における単元レベルでの「学びの文脈」イメージ

その後の学習計画は、子供と一緒に決めました。

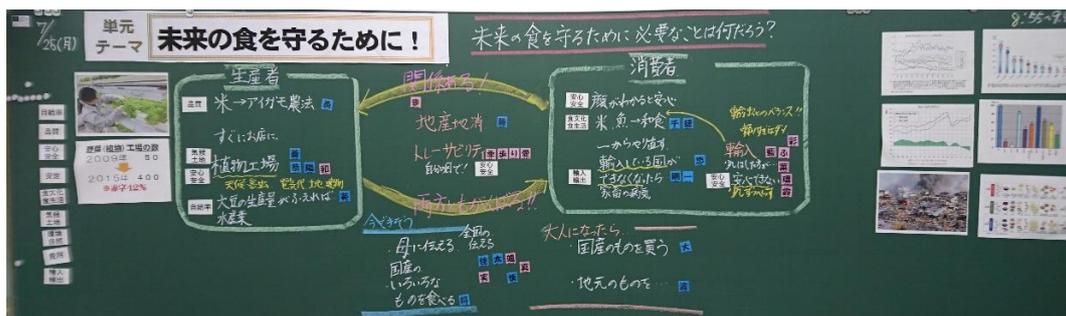
単元展開期では、それぞれの関心や疑問、問題意識にそって、資料の収集、選択、読み取りなどの調査活動を行います。（図2）。

そして単元まとめ期では、それぞれの考えを交流し、「未来の食を守るために必要なことは何か」について考えを深め、最終的な自分の考えをもつことをゴールとして設定しました。

このように、課題（単元テーマ）設定において子供の思いをもとに課題を設定したり、それにそって学ぶ学習計画を子供と共有したりしました。このことによって、学びの連続性や必要性、関連性を自覚し、一時間一時間自分の学びをつくり上げていく姿が見られました。

- 輸入をなくすことはできるのか？
- 輸入のメリット・デメリットは？
- 輸入しているのはどんなもの？なぜつくれない？
- 国産と外国産はどちらがいいの？
- 外国の食料自給率はなぜ高い？
- 日本はどのようにして食料自給率が低い？
- なぜ食料自給率が低下した？
- どうすれば食料自給率は上がるのか？
- これからの食料生産に必要なことは？
- 食生活は変えられる？
- 安全・安心な食に必要なこととは？
- 生産者の思いは？消費者の思いは？ など

（図2）子供の調査テーマの例



本時（6／6）の板書記録

このような調査活動をサポートするものとして、単元開始期に、視点のキーワード化を行いました(図3)。このように子供たちの疑問をキーワード化し、絞り込むことで、自分と同じキーワードの人と小交流をしたり、異なるキーワードの人の考えを取り入れたりすることができる考えたからです。子供たちは、

- ・ 「安心・安全」の実現のためには「費用」がかかることもある。
- ・ 「輸入・輸出をなくして「食料自給率」を100%にするだけでは「安定」しているとは言えない。

など、いろいろな考えを聞き、共感したり議論したりする中で自分の考えを深めていくことができました。

- ◇自給率
- ◇安心・安全
- ◇安定
- ◇環境・自然
- ◇気候・土地
- ◇食文化・食生活
- ◇費用
- ◇輸入・輸出

(図3) 視点のキーワード化

このような協同的な学びの中で、食料生産や食生活のあり方を見直すには、一つの問題だけではなく、多様な問題があることを子供たちは実感することができました。



視点ごとに話し合う

また、交流の中で「生産者としての立場」と「消費者としての立場」によってできることが違うことに気付きました。ある子供は、「食料自給率を上げるためには、どんどん生産量を増やしたり、日本でもたくさん大豆を作ったりできるようにすればいい」と考え調べていましたが、消費者や自分たちでできることを考え調べていた子供と交流し、「生産者も消費者もがんばらないと食料自給率は上がらない」と考えるようになりました。その後は「生産者」を支える「消費者」としても、これからの食について考えていました。

このように、お互いの考えや気付きを話し合うことで、補完したり練り合ったりしながら自分の考えをまとめていくといった、子供の主体性がより発揮された調査活動を行うことができました。

視点3：目的に応じた弾力的な振り返り

視点3 目的に応じた弾力的な振り返り
【連続的・継続的な学びへ】

次の学習へ

単元テーマとのつながり

本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」【連続的・継続的な学びへ】

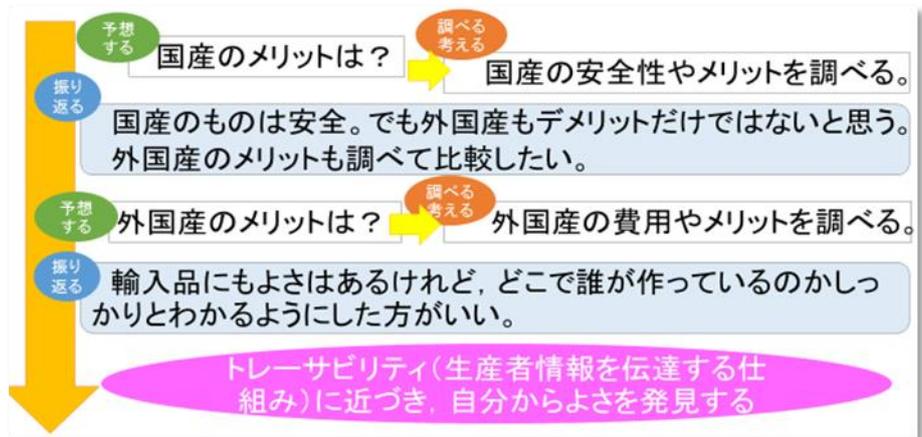
本実践における「目的に応じた弾力的な振り返り」【連続的・継続的な学びへ】

- どんな時間だったか
- わかった・できた・思ったこと
- 考えたことや考えが変わったこと
- 次の時間やこれからしたいこと
- 見つけたい資料
- 友達とのかかわり(よさ)
- ☆ 単元テーマについての自分の考え

3時間設定した調査活動を、より充実して取り組むことができるように、振り返りの視点を明確化しました(図4)。学習計画を立てる時に、これまでの学習で振り返りに書いていたことを見直し、何のために書くのか、どのようなことを書くと「学びの記録」として活用できるかを子供と共有しました。

本時の: (図4) 振り返りの視点 焦点化することで、子供自身が振り返りの価値を実感し、学びの連続性や関連性、継続性を意識することができるようになりました。

連続的な学びをすることができた例として、まず国産のメリットを調べ、次に外国産のメリットについて調べた子供がいます(図5)。この子供は連続的な学びの中で、「トレーサビリティ」に近付きながら、自分からよさを発見することができたのです。



(図5) 連続的な学びの例

振り返り活動の充実は、自分の学びを価値付けするだけでなく、協同的な学びの価値を実感させることにも役立ちました。子供たちの振り返りでは、

- Aさんが、「教科書の〇ページに、こんな資料があるよ。」と教えてくれた。そのおかげで自分の考えがまとまりそう。
- 一人で考えていたけれど、少し相談したら新しい考えが出てきた。野菜工場は食料自給率アップにつながるかも。

などの振り返りも見られました。

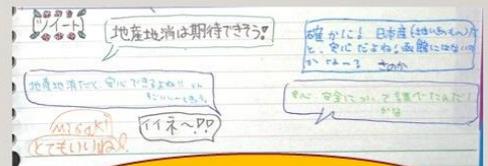
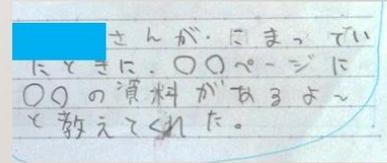
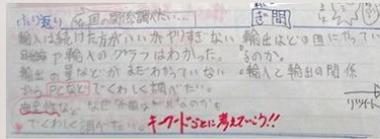
振り返りの充実のため、教師がノートにコメントをすることで、子供が単元を通して連続的・継続的に学び、自らの学びの価値を実感できるようにしました。

視点3

目的に応じた弾力的な振り返り 【学びの価値の実感】

＜振り返りの視点＞

- どんな時間だったか
- わかった・できた・思ったこと
- 考えたことや考えが変わったこと
- 次の時間やこれからしたいこと
- 見つけたい資料
- 友達とのかかわり（よさ）
- ☆単元テーマについての自分の考え



視点の明確化・共有化

学習の成果等の
自己評価・相互評価

協同の価値の実感

本実践における「目的に応じた振り返り」【学びの価値の実感】

次のステップとして、振り返り記入後に子供同士で交流し、お互いにコメントを付け合う活動に取り組みました。子供同士が相互に学びや気づきを評価することによって、自分の考えを深めることができます。さらに、他者の考えに関心をもち、次の時間の交流のきっかけを作ることもつながりました。授業以外にも資料を探し、本時の課題を確認し合った直後から話し合いを始める子供もいました。

授業者からのコメント

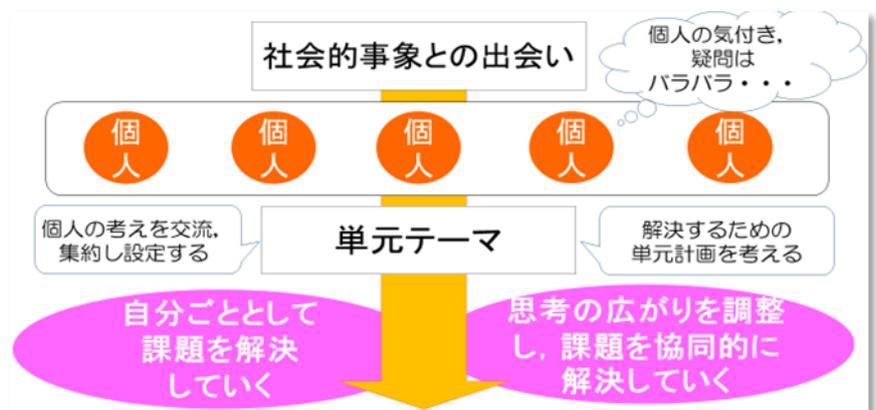
「単元テーマ」によって主体的・協同的に課題解決に向かう

今回の実践では、それぞれの思いや気づき、疑問を束ねる単元テーマを設定しました。この単元テーマを設定したことで、2つの効果がありました。（図6も参照）

- ① 自分の思いや気づき、疑問が単元テーマとして位置付くことで、より自分ごととして主体的に課題を解決していく。
- ② それぞれの思考の広がり进行调整し、課題を協同的に解決していく。

これらの2つは、単元計画を自分たちでデザインすることにより、

いっそう効果的でした。一時間一時間が分断されずに、単元を通した課題解決にもつながりました。



(図6) 単元テーマ設定のイメージ

今回は、単元開始期に日本の食料生産や自分の食生活について課題意識をもち、単元テーマを設定しました。そのことによって、単元展開期でも、単元テーマに対する意識を毎時間もちながら、取り組むことができました。調べたことが「未来の食を守る」ことにつながるのか考えたり、調べたことを生かして「未来の食を守る」ためにはどうしたらよいかを考えたりしながら、課題解決に向かう子供の姿がありました。

課題として、現在をしっかりと捉えていないままに未来を考えようとしている子供もいました。子供の学びや思いに合わせて設定した単元テーマを、時には軌道修正や焦点化、広範化していきながら、段階や方向性を見出してあげることも必要であると感じました。

協同的な学びを通して多面的・多角的に考える

協同的に学ぶことによって、物事を多面的・多角的に考える力を高めていくことができるのだということを今回の実践で強く感じました。(図7)

本実践では、まず個人での追究を中心に行いました。

その後、キーワード化した視点を手がかりに、子供たち自身で必要に応じて小交流をしていました。

小交流の後は、自分と同じキーワードの人の情報をもとに理解を深める子や、他のキーワードの人の情報をもとに自分の考えを見直したり、合わせて考えたりする子もいました。

単元の最後で行った全体交流では、個人の学びの一つ一つがあってこそ成り立つものでした。

「未来の食を守る」といっても様々な課題があり、多様なアプローチがあることを、他の子の考えによって理解できるのだと考

えます。今後は、多様な考えを認めるだけでなく、「本当にそうなのか？」という見方を高め、より深い学びを目指していきたいと思います。



(図7) 本実践における協同的な学びのイメージ



単元テーマについて交流し、多様な考えにふれる

振り返りから未来志向へ

今回、振り返りの視点を明確化し、子供自身が一時間の学びをしっかりと振り返ることで、4つの成果がありました。

- ① 調べたことをもう一度見直し、自分の考えをより深く考える。
- ② 単元テーマと照らし合わせることで、思考の広がりを調整する。
- ③ 次の時間の見通しや期待をもつことができる。
- ④ 協同的な学びのよさや友達とのかかわりを実感できる。

単元を通した課題解決に向かっている子供たちは、「次はこうしたい。」「まだ〇〇について調べたい。」「□□さんの考えをもう少し聞きたい。」と、次の時間のことを進んで書いていました。

ただ、今回、「～がわかった時間。」「～について調べた時間」という振り返りのみにおさまる子供がいました。より深い学びに迫るためにも、より相手意識をもった協同的な学びと「どのように学んだか」についての観点を大切にすることが必要だと感じました。ゴールを目指しつつも、自分自身の学びのプロセスについてしっかりと振り返りながら、友達との交流や協同的な学びのよさを一層実感することが必要だと感じています。これらは、子供自身が「未来志向」への第一歩を踏み出すことにもつながるのだと考えています。